

「全鍍連」 2016年 12月号 いきいき地域

全鍍連情報・国際委員 藤田 泰三 (株)エフテックス 代表取締役)

「『神ってる』に肖って」

広島は市内に6本の川が流れていることから「水の都」と呼ばれ、その起源は約400年前に毛利輝元が太田川の大きな三角州に広島城、別名「鯉城」を築いたときに遡る。

またその一級河川は鯉の産地でもあり、その程近いところに己斐（こい）町という市民であれば誰もが知っている街がある。鎌倉時代よりその名があり、一説には「鯉村」から転じたと言われており、今でも川岸では「出世鯉」を目当ての釣り人を見かけることがある。

岡山、広島、山口3県の広域にまたがる中国表面処理工業組合の組合員は、二社の地元車メーカーに因ることで、大きく明暗を分けることになった2016年の年末を迎えようとしている。

その一社は白壁に柳が揺れる美観地区を擁する倉敷市の南部、水島の街にある。戦前三菱重工業水島航空機製作所は「零戦」の後継戦闘機「紫電改」を生産し、戦後は三菱自動車水島機器製作所に改組し、軽四輪の主力工場として発足した。トヨタの十分の一、規模の小さいメーカーゆえ、研究開発への焦りがあったのだろうか。そして同規模でありながら、好調な「スバル」や「マツダ」と何が違ったのか。環境変化に対応せず内部の論理に固執する組織は、幹部の自己保身や思考停止により自ずと淘汰されていくことになる。組織の変革に対する最大の敵は、変化を受け入れたくない内部にあるといわれる。日産という「俎上」に載り何とか10月から本格的に生産販売を再開したもの、地区の雇用環境はもちろん、当組合会員に与えた負のインパクトは凄まじいものがあった。今後、環境変化を経営に反映する仕組みを早急に構築し、再び立ち直ることに組合員も期待を寄せている。

他方、広島、山口に生産拠点を置く「マツダ」、その社名は創業者の松田重次郎の姓に由来している。マツダはロータリーエンジンなど内燃機関の開発技術には定評があったが、80年代になり、開発と販売の狭間で販売不振に陥り、フォードの傘下に入った。しかしながら、フォードから独立後徹底的な技術へのこだわりでブランド力の向上を図り、現在業績は好調に推移している。

また一方、「広島東洋カープ」の球団名は前述の「出世鯉」に由来している。発足から「市民の球団」を源流としていることもあり、マツダは業績不振を理由に球団経営から手を引いた。それでも今なお株主でもあり、球団名に旧社名東洋工業の「東洋」を冠している。現に本拠地の球場名は「マツダスタジアム」であり、マツダ車に多い「ソウルレッド」が塗膜設計を同一にして選手のヘルメットカラーになっている。そのカープが25年ぶりにリーグ優勝を果たした。緒方孝市という指

揮官は現役時代、巨人から何倍もの年俸を積まれても愚直なまでにカーブ残留を選んだ。「分相応、田舎者は無いものねだりしない、資金に限りがあり選手がいなければ自前で育てるのみ」と彼の信念を貫いた。球界で最も経済的に厳しいと言われるカーブは、言い方を変えれば「日本で唯一スポンサー企業にあまり依存せず、独立採算で球団経営を貫いている黒字球団」とも言われる。

そして今回の「メークドラマ」は、マツダの“ものづくり”への情熱、そして研究開発費が少ない中で、知恵を出し合い経営陣が開発陣を信頼して「品質」の革命に取り組んだ結果と相似している。我々も「神ってる」に肖って、来年こそ地に足をつけて前に進みたいと考えている。

(株式会社エフテックス 代表取締役)